

調査結果の概要と課題・対策について

新しい「令和」という時代を迎え、今年度も実施したこの「新発田市食育実態調査報告書」を踏まえ、今後も当市における食育の根幹をなす「食とみどりの新発田っ子プラン」という食育プログラムの在り方を再考察し、時代に合った取組に見直しを行っていく必要がある。

今年度の調査結果から「育てる」（栽培）については、中学校3年生においては、「『地産地消』という言葉の意味を知っている」割合が増加していることから、確実に食育指導や関連する授業から地域の特色を「考える」、「調べる」という活動が理解につながっていることが伺える。しかし学校別集計結果を見ると市街地の学校においては、認知度が低い学校もあることから、市内でも子どもが育つ環境や地域性に違いがあることがわかる。

「作る」（料理）については、この「食とみどりの新発田っ子プラン」で目標としている、小学校6年生で「一人で弁当を作れる子ども」、中学校3年生で「一人で小煮物（のっぺ）のある夕食1食分を作れる子ども」に関する設問の数値が伸びていないことから、今後目標設定や食育指導の在り方について検証することが課題である。しかし学校別に検証してみると、「弁当の日」の取組活動をおこなっていない学校でも、毎日家事の手伝いをする子どもの割合が高く、「弁当の日」の取組に向けて熱心に食育指導を受けている学校においては、弁当をつくることのできる割合が高いなどの結果もでていることから、今後はもっと詳細を分析しながら目標に向けた取組がより分かりやすくなるような工夫が必要である。

「食べる」分野における結果について、毎日の朝食摂取についての設問があるが、この項目およびその理由としては、例年のように小学生から中学生になるに従い朝食の摂取率が下がり、「食欲がない」「時間がない」という結果となっている。食育を推進する側からすれば、バランスのとれた朝食を食べてもらいたいという思いがあるが、生活スタイルも多様化している現代においては、朝食を毎日食べるという習慣を身に着けるまでの様々なスキルを子どもたちに身に付けさせることに意識した指導を心がけていきたい。

「返す」（リサイクル）の結果については、あまり大きな変化は見られなかったが、当市が食育を推進するプランの基本となる「食の循環によるまちづくり」では、特にこの「返す」（リサイクル）がこの循環における特色の1つでもあり、これまでも学校では給食残さを有機資源センターへと運び、堆肥化し、学校の花壇や畑等の肥料として返してきた。またこれまでもその一連の取組内容を子どもたち自ら施設の見学等を通し学んできたことが、この集計結果を詳しく見るとわかることから確実に成果につながっている状況である。

このように「食の循環によるまちづくり」を基本とした当市の食育活動の取組の中には、地域の特色を生かし、そのあふれる自然豊かな資源を未来の新発田を担う子どもたちに教え、受け継いでもらうために、気持ちを込めて取り組んでいるものであり、今後もより一層食育指導に熱を入れて、子どもたちのやる気につながる活動に寄与してまいりたいと思います。